



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.147  
2015.12.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

46

## 「日本考古学協会委員と 長野県考古学会事務局を」

1973年 日本考古学協会委員に立候補した。当時は協会委員には全国区と地方区があって、私は中部地区委員として樋口昇一さんに薦められて立候補し当選した。此の頃、旅費宿泊費は自己負担であり、手当てはでない全くのボランティアであった。木曾からだと日帰りは出来なく、勤めもあって委員会には中々出席できず総会・大会時の委員会に出席するのみだった。当時は学生運動が激しく 考古学専攻生も大学研究室や日本考古学協会への批判や抗議行動もみられた。1974年5月の豊島公会堂での総会では学生が会場内に入っの抗議活動を防ぐために、入り口に立ってバリケード役をした。学生たちがばらまいたビラを集めたこともある。記録を残していないので役員の係りや、役員会での討議は全く覚えていない。

役員とは関係ないが協会で思い出すのは 一度総会で発表をした。当初 縄文早期押型文の立野式土器をと申し込んだが 北原遺跡を発掘して弥生中期の成果を知ってもらいたく急遽会場で変更して発表した。この変更について批判もあった。また会場での報告書販売は大変な盛況でした。私も何度か販売者になった。何年の何処の会場か忘れたが長机に3人が割り当てられ中村二郎・斉藤弘道さんと並んだ。これがキッカケで親しくなり交友が続いた。斉藤さんは木曾に私を訪ねてくれた。

1979年6月の長野県考古学会総会で学会事務局を私が受けることになった。北信での森嶋稔さんの事務局の任期が過ぎて次が決まらず1年延びていた。やむを得ず引き受けた。学校長の理解で中学校図書館の一室を借りて学会財産を保管した。

問題は事務局委員で木曾には会員がいても年配者で手伝いは無理だった。大学後輩の岡谷市会田進・塩尻市小林康男・駒ヶ根市気賀沢進・小諸市花岡弘君等に協力を頼み花岡君は遠いので日本考古学協会での本販売時の手伝

いを頼んだ。他の三君は事務局の役割分担を、木曾での事務局会には集まってくれて82年6月までの三年間を助けてくれた。このときほど考古学で結ばれた大学の繋がりが嬉しかったことは無い。

3年間の事務局で 会田君が編集して長野県考古学会誌を7冊 私が編集して連絡紙15回出した。毎年の総会・大会では1980年10月の野辺山大会が記憶に強い。明治大学が矢出川遺跡群を調査していて、その纏めとしてのシンポジウムを戸沢充則さんの協力でもった。戸沢・麻生優・町田洋・安田喜宏さん等の発表もあって100余人を超える参加者で 県外から50人も参加者がいた。この大会で地元の由井茂也さんの藤森栄一賞の授賞式も持った。此の大会が一つのキッカケになって矢出川遺跡群の保存運動に発展した。

1962年に長野県考古学会が発足してからの20周年が82年で、その記念事業をいくつか計画した。『中部考古学会彙報』の復刻・『中部高地の考古学Ⅱ』の刊行・『長野県考古学会誌創立20周年記念特集号』42・43合冊の刊行がそれで、82年6月の総会後会場を別にして20周年記念・大沢和夫会長喜寿記念祝賀会を持った。『中部高地の考古学』には考古学関係者以外に飯田中学での大沢先生の教え子三浦宏・鎮西清高・市瀬由自さんの投稿もあって内容豊かな本になった。

81年刊行の『長野県埋蔵文化財白書』は森嶋事務局の仕事で、編集は林茂樹委員長の埋蔵文化財特別委員会によるものであり、私の仕事ではない。

信濃毎日新聞社では『信州の文化シリーズ』を企画し、その7冊のひとつに『遺跡と遺物』があり、長野県考古学会に依頼があり、事務局委員を中心に小林正春・森山公一君を含めて解説を担当し、多くの会員の協力で編集した。全てカラーでの写真で埋められた内容ある本になった。この本は県外には売れなかった。

県考古学会設立提案者としてやむを得ず受けた事務局であったが、会田・小林・気賀沢君等の後輩の協力があって無事やり遂げることが出来た。感謝感謝の3年間。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲1973年度長野県考古学会春季総会

## 目次

- |            |                             |         |          |                       |         |
|------------|-----------------------------|---------|----------|-----------------------|---------|
| ■田舎考古学人回想誌 | 日本考古学協会委員と長野県考古学会事務局を       | 神村 透 …1 | ■リレーエッセイ | マイ・フェイスレット・サイト(第140回) | 笠井崇吉 …3 |
| ■考古学の履歴書   | 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第9回) | 岡田淳子 …2 | ■考古学者の書棚 | 「歴史考古学の構想と展開」         | 河西克造 …4 |

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第9回) 岡田 淳子

## ⑨米国留学の顛末

大学院を終えても研究職は得られず、私と夫は臨時職員と翻訳で生計を立てていた。そんな時、考古学者のC・S・チャード博士から、研究費+滞在費を二人分用意するので米国の大学に来ないかとお誘いを頂いた。それは望むところだが、私たちには旅費を用意することもできない。1ドル360円の米ドルに換算すると、大卒初任給が50ドルにしかならない時代だから、一人3500ドルの渡航費をどうすれば捻出できるのだろう。

夫が指導教官のところへ行って相談したところ、即座にフルブライトの旅費支給奨学生に応募したらと示唆してくださったという。夫はいいかもしれないが、私の英語能力は低く、ためらいながらも、だめでもともとと開き直って受験した。

その結果、運よく私たち二人は1964年8月末、始めて日本を離れることになった。私は第一専攻を考古学(人類学)とし、第2専攻を博物館学としたのが決め手になったらしく、米国の試験官から博物館学の留学生は日本からはじめてなので、大いに期待すると言われた。また夫婦で研究に夢中になり離婚しないようにという条件が付き、私には英語の研修も用意された。

フォー・レイクス・シティー(四つの湖の都市)といわれるマディソン市に着くと、米国・中西部の秋はことさらに美しく、アメリカは想像以上に豊かであった。広い敷地に住宅が散在し、大きく育った街路樹ではリスが木の実を集めている。朝、1講目の講義「考古学概説」を受けて急いで帰宅すると、夫と幼い娘が芝生で楽しそうに遊んでいる。戦後20年経っても、日本ではどうしてこれだけの精神的ゆとりがもてないのだろうと思った。

カリキュラムは充実していた。化石人類はヨハネスブルグでアウストラロピテクスの発掘を手がけていたロビンソン教授、形質人類学はラープリン教授、世界の先史時代はチャード教授とヨーロッパから招かれた客員教授、アメリカ先住民については、バレス、マクレラン両教授、言語人類学は戦時中から日本語が堪能だったアーマンドルフ教授など、講義やゼミが次々に行われ、この他に、月に一度は米国々内や世界各地で活躍中の研究者を招いて講演会が開かれる。本を読むより理解が容易なので、私は毎回この講演会に出席して見聞を広げた。

米国の歴史は、メイフラワー号以後の250年足らずだから、米国の考古学は先住民の歴史や文化を研究するもので、日本とはかなり意識が違う。考古学は歴史学と無関係であり、研究方法から人類学の範疇に入っている所以である。

午後5時になると、教員も院生たちも家族と共に夕食を摂るため、さっと家に帰り、一時間ほどするとまた三々五々集まって来る。みな研究に余念がなく、研究室や実験室は毎夜遅くまで明かりが灯っていた。保育園についても大学町に合わせた施設があって、生活に少し慣れると、私は9時から5時まで心おきなく研究室に通い、娘は楽しそうに保育園に通って、いつの間にか英語を話していた。

学年が終わりに近づくと、院生たちは夏休みの研究計画や、来年からの過ごし方について話し合う。もちろんそのまま同じところで研究を続ける人もいるが、半分位の人は、もっと自分の研究に合った他の大学に移ったり、条件の良い奨学金を探したりする。ウィスコンシン大学の人類学部は、当時、北方の研

究に興味をもつ人が多く、日本もまた人気の調査地であった。私たちは日本で調査をしたいと望む3組6名の人たちのお世話をすることになり、それが後に、私たちのアラスカプロジェクトへの足掛かりにもなった。



▲1万年前の石器採石場 ピラミッドレイク遺跡(1965年7月)

主任教授が中心になって行われる学年末のフェア・ウェル・パーティーで、それぞれに別れを告げ、再会を願って旅立つのである。私たちも情報を集め、米国の遺跡や博物館、先住民文化を知るためのキャンプ旅行に出発した。1カ月半で合衆国の西半分をまわり、8月後半には大学に戻る予定であった。

旅程は、マディソンからまず西へ、ラ・クロスでミシシッピー川を渡る。ここには墳丘文化のマウンドがあり、その上に「最初の百万長者」の家が建てられたことでも知られていた。ロッキー山脈の東麓を南下して南西部にいたる。デンバーで博物館の館長をしていた大先輩の女性考古学者を訪ね、地質学者のご主人との晚餐に招待されたり、自らを「8分の1インディアン」という友人が紹介してくれたユート・インディアンのサン・ダンスに一週間も参加したり、多彩な旅になった。

雄大なグランドキャニオン、そこに散在するプエブロの幻想的な村々、ピラミッド・レイク遺跡の1万年前の乾燥した魚。キャンプの間、暗くなったら寝るはずだったのに、つい文献を読みふけて夜更かしをしてしまった。

フーパー・ダムを抜けて西海岸へ出る。サンディエゴ、ロスアンジェルズ、サンフランシスコと、西海岸地域は大学と博物館には事欠かない。レイク・タホで、1万マイル走破の乾杯をし、ワイオミングでは当時北米で1番古いといわれていた「ヘルギャップ遺跡」の発掘にも参加した。その後、大統領の頭部彫刻のあるマウント・ラシュモアを経て、1カ月半のキャンプ旅行を終え大学へ戻った。

2年目は、アメリカの大学生活にも慣れて、秋のAA学会や東部の博物館、遺跡などを巡って、訪問した博物館は79館に達していた。夫の職が決まって帰国することになり、私は米国で1年期限の博物館の職につきたかったが、家族を優先して帰国することに決めた。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## U レーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 140

## 赤柴(あかしば)遺跡 ～福島県南相馬市～

笠井 崇吉

私にとって、Favoriteであるかはさておき、unforgettableな遺跡は、福島県浜通り地方の南相馬市原町区に所在する赤柴遺跡です。この遺跡は、常磐自動車道の建設に伴って2006年から2009年にかけて4次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代早期後葉～前期初頭の墓域を含む集落跡、縄文時代後期前葉～中葉の小河川に臨む集落跡、平安時代の鍛冶及び土器造りを行った集落跡を中心に、弥生時代中期の竪穴住居跡や太平洋戦争中の防空壕等が調査されました。

赤柴遺跡の縄文時代早期後葉～前期初頭にかけての集落は、河岸段丘上の平坦地に営まれていました。平坦地の中心付近には、作業場と推定される特殊遺構とした不定楕円形の窪地状の遺構が北東～南西方向に並んでおり、その床面上には地床炉と推定される焼土の広がりが見られました。これらの特殊遺構の北側には竪穴住居跡として報告した楕円形及び隅丸長方形の竪穴状遺構が特殊遺構に平行するように並び、南側には墓塚と考えられる楕円形の土坑群が位置していました。これらの遺構からは、概ね早期後葉の茅山上層式に併行すると考えられる外面に貝殻条痕及び単節縄文、内面に貝殻縄文が施された一群の土器とともに北前式や梨木畑式が出土しています。墓塚群と重なる位置から南側にかけては、北側の遺構群よりやや新しい早期末葉の所産と考えられる内・外面に貝殻条痕が施された一群の土器と大畑G式や日向前B式が出土する隅丸長方形や長方形の竪穴住居跡と窪地状の特殊遺構が混在して分布しており、平坦な地形の連続性から、調査区外の南東側へ遺構群は続くものと推定されます。続く前期初頭の花積下層式期になると、早期後葉の特殊遺構群と重なる位置に隅丸長方形や隅丸方形の竪穴住居跡が分布します。また、これらの竪穴住居跡群からやや離れた南西側にフラスコ状土坑を転用した墓塚と考えられる土坑群があり、縄文時代早期と比較すると墓域が南へ移っていることが判明しました。

縄文時代後期の集落跡は、早期～前期にかけてのそれとは、明確に立地を異にしており、調査区南部の段丘南東部の斜面地に営まれていました。斜面の下は沖積地で、南西から北東方向へ流れる川跡が見つかりその川を埋めるように、当該期の遺物包含層が形成されていました。川岸から上位段丘の縁辺部にかけての南東向き緩斜面では、60m×20mの狭い範囲に、後期前葉の綱取I・II式と後期中葉の加曾利B2・3式を伴う20軒以上の竪穴住居跡が重複して検出され、この場所が当時の住居を建てる上で好ましい場所であったことがうかがわれます。後期の竪穴住居跡は、不整形で、床面に石囲炉を有するという共通した特徴をもつものの、前葉の住居跡の規模が直径3～

4mであるのに対し、中葉のものは4～5mと大型化する傾向が見受けられます。また、石囲炉も前葉のものは床面の一方に偏って造られ、規模が小さく縁石も一部設置されていないものが散見するのに対し、中葉のものは床面中央に位置し、縁石はほぼ均等の大きさの礫を円形に並べるものが多く、少しずらした位置に作り変える例も複数で認められました。集落の構成としては、後期前葉では、竪穴住居跡の他に住居跡の残骸と推定される炉を持たない竪穴状遺構や配石・集石遺構、埋設土器遺構、土坑が検出されているのに対し、中葉では配石・集積遺構や埋設土器遺構が認められなくなります。

赤柴遺跡の川跡を挟んだ対岸には、荒井遺跡という沖積地上の微高地の遺跡が隣接しており、ここからも後期中葉の竪穴住居跡が見つかっています。遺構は明確でないものの、後期前葉



▲縄文時代早期後葉の墓域と末葉の住居跡



▲縄文時代後期中葉の遺構群

の遺物包含層も形成されていることから、当該機の集落域はより南東側へ広がっていた可能性があります。赤柴遺跡の縄文時代後期の集落からは、土偶等の祭祀的遺物が希薄で、有溝土錘や石鏟が複数出土していることから、漁撈や狩猟を糧とする小集落の姿が復元できそうです。

平安時代の集落跡は、出土遺物から9世紀代の所産と考えられます。集落域は調査区のほぼ全域におよびますが、立地により遺構群の性格が異なるようです。段丘頂部の平坦地には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器廃棄土坑、木炭焼成土坑で構成される遺構群が見つかりました。竪穴住居跡の床面には、鍛練鍛冶を行ったと考えられる鍛冶炉が見つかっています。段丘南東縁から斜面にかけては、竪穴住居跡、製錬鍛冶遺構、溝跡、木炭焼成土坑、土器製作遺構で構成される遺構群があり、特に鍛冶遺構は溝で区画され、工房的な性格がうかがえます。両遺構群は一つの大きな集落の一部であるのか、各々独立した集落であるのか断定できませんが、当該地域で8～9世紀にかけて盛んに行われた官営製鉄の末端に位置する集落であることは確実なようです。

私は1次調査の副担当、2～4次調査の主担当として赤柴遺跡の発掘調査を行い、報告書の執筆・編集責任者としてその刊行まで足かけ5年にわたってこの遺跡に携わりました。4次にわたる調査で、結果的に報告書の頁数は800に膨らみ、他に5遺跡をかけもちながらの作業は本当に修羅場でした。また、当初刊行予定であった2011年3月には、ご存じのように東日本大震災が発生したため、刊行が次年度の4月にずれ込んだことも苦い思い出となっています。遺跡の詳細は『福島県文化財調査報告書第472集 常磐自動車遺跡発掘調査報告63』をご覧ください。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは高橋 保雄さんです。

## 考古学者の書棚

## 「歴史考古学の構想と展開」

坂詰秀一 著／雄山閣出版(1977)

河西 克造

小学校5年の時、学校行事として尖石考古館（当時）と尖石遺跡の見学があり、遺跡の中を歩いていた時に黒曜石を拾った。それが切っ掛けとなり、中学校と高等学校在学時には歴史・考古学に関わる部活動を行い、さらに大学でも考古学を学び現在に至っている。現在、埋蔵文化財に関わる仕事に従事しているが本稿では公私ともに考古学一色に染まった人生を歩む切っ掛けとなった書籍を紹介したい。

私の自宅は長野県諏訪市にある。学業を疎かにし、地歴部の活動にのみ邁進した高等学校は隣の市にあったため、毎日自宅からJR（当時は国鉄）上諏訪駅まで自転車をを使って通学した。考古学に関わった方であれば、「考古学」「諏訪市」の言葉である人物を想起するであろう。あの藤森栄一氏である。藤森栄一氏の旧宅（旅館「やまのや」、兼「諏訪考古学研究所」）は6年間通った小学校の下にあり、藤森栄一氏も社長を務めた博信堂書店は上諏訪駅のほど近い場所にあった。小学校在学時、グラウンドのネットを超えた野球のボールを探しに行くと称して藤森先生の旧宅を見に行ったり、また高等学校の帰宅時は、ほぼ毎日と言ってよいほど博信堂書店に寄って歴史・考古学の本を読んでいた。高校生にとっては高価な「藤森栄一全集」が店頭に並び始めており、私はこの本を立ち読みすることにとどめていた。

中世城郭に興味を持っていた私は、高等学校の地歴部で諏訪に分布する山城について調査し、大学でも城について勉強したい意思があった。しかし、高等学校3年になっても志望校が決まらず悩んでいた。博信堂書店の「歴史」コーナーには、藤森栄一先生の著書を始め、歴史や考古学の書籍が揃っていた。その量は、市内にあるほかの書店と比べて歴然とした差があった。当然と言えば当然であるが、「歴史」コーナーの本棚最上段には雄山閣が出版した考古学選書がほぼ全冊並んでおり、私はそのなかに「歴史考古学」の言葉が背表紙にある書籍を1冊見つけた時のことを今でも覚えている。この本が今回取り上げる『歴史考古学の構想と展開』（以下、本書）がある。

当時の私は、城を考古学の分野で勉強する場合、「歴史考古学」の分野になることはわかっていた。そこで、本書を開き、中世の城館跡のことが書かれていることを確認した上で購入した。カウンターには藤森栄一氏のご令弟がいたと記憶しているが、考古学選書を買う高校生を珍しがって見ていたのではないだろうか。

本書は、歴史考古学の構想（歴史考古学の歩み、歴史考古学の進展、中・近世考古学の近況など）、都市・集落遺跡、窯跡生産の遺跡、仏教の遺跡、神道関係の遺跡、以上5節で構成され、各節には著者である坂詰秀一氏が関わった数多くの歴史時代遺跡の調査・研究成果が盛り込まれている。また、本書の内容は歴史時代のほぼ全般に及んでおり、随所に坂詰秀一氏の提言が披瀝されている。本書が出版された昭和52年当時、中世城郭の発掘調査はトレンチ調査が主体を占め、広範囲な面調査がまだ緒についたばかりであった。また、歴史時代に属する遺跡の調査・研究が充分普遍化していなかった当時、本書は全国的な視野で歴史考古学の現状や問題点、方向性を示唆し

た意義深い書籍と位置付けられる。

受験勉強もそっこのけで本書を熟読した私は、坂詰秀一氏が中世城館跡の調査・研究について指摘している部分を、定規を使ってボールペンで赤線を引いた。その中には、「中世考古学にしても近世考古学にしても一面において文献資料の史料性に依存することによって構成されている中世史・近世史のイメージに当分の間、追従しなければならないであろう。しかし近い将来、中・近世考古学の方法論が確立され個別的な研究が積みあげられたときこそ、対等の意味あいにおいて文献史学との協同研究が果たされることになるであろう。」（本書29頁）との指摘があった。この線引きにより、中世の城館跡を調査・研究する重要性がわかった。今思うと、本書に線を引いたことが考古学の分野から城を勉強したいと意思を固め、志望校を坂詰秀一氏が教壇に立つ立正大学に決めたことに間違いはない。

晴れて立正大学に進学したが、1・2年の教養課程（埼玉県熊谷市）で坂詰秀一氏（以下、先生）の授業はなかった。しかし、熊谷キャンパスに週1回坂詰先生が別な講義を行うため来ていた。そこで、大学1年の時、本書と雑誌『歴史考古』を携えて、先生がいる考古学陳列室もしくは講師室に足を運び、「歴史考古学の概念とはなんですか」など、とんでもない質問をしたことを覚えている。若者は恐れを知らないとつくづく思う。考古学の「こ」の字も知らない青二才の質問を聞き、先生は一笑に付すと諦めていた。ところが、懇切丁寧に答えてくれたのである。これが、今でも中世考古学を学んでいる所以であると思う。



▲上田市信濃国分寺跡で坂詰先生と

以上、高校3年の時に本書を博信堂書店で見つけてから現在までの足跡を書かせていただいた。自身の回顧的な内容となり、本来の目的である書籍の紹介が充分なされていない点は誠に申し訳ない限りである。

歴史考古学は、中世考古学や近世考古学、仏教考古学などと細分化され、調査・研究が進展している現状である。当然、調査事例が蓄積されることで明らかになることはあり、また、発掘で歴史的に著名な人物（固有名詞）と関係した遺構・遺物が発見されると、一躍脚光を浴びることがある。これは当然なことではあるが、時には調査・研究の原点に戻って、物質的資料である「もの」は何を示しているか、を考える必要があるのではないだろうか。ここで本書を取り上げたもうひとつの理由がこれである。

## アルカ通信 No.147

発行日 2015年12月1日  
企画 角張淳一（故人）  
発行所 考古学研究所（株）アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp